近代日本 製本関係雑誌集成 1
―大正・昭和初期編

技術が生活・思想・表現文化に及ぼすことへの変化を見極める

全七巻・別冊
【編集復刻版】

本集成は、往時のこの国の製本界の諸相を映し出す貴重な情報源であるとともに、近代日本のあゆみを解き明かすことができる一級の資料でもある。

図書館学、書誌学、出版史、産業社会史、美学・デザイン史、メディア史、近現代史、近代文学研究など、多様な領域を横断。本づくり・製本に関心のある方すべてに!!

編・解題―小黒 浩司（作新学院大学教授）
造　本―A5判・上製糸かがり（別冊のみ並製）・総約2,220頁
揃　価―132,000円（配本毎・別冊分売可）

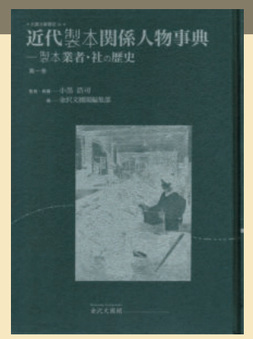
【第一回配本】2019年9月　配本揃価　37,000円　ISBN978-4-909680-47-1
第一巻（284頁）『日本製本時報』1巻1〜4号（日本製本時報社、1918年11月〜1919年12月）
第七巻（318頁）『東京製本同業組合月報』28、29号
（東京製本同業組合、1927年〔4月〕〜6月）
『製本業報』創刊号（1巻1号）〜4号（製本業報社、1927年7月〜12月）

【第二回配本】2020年4月　配本揃価　39,500円　ISBN978-4-909680-48-8
第二巻（242頁）『日本製本時報』2巻1〜4号（日本製本時報社、1920年5月〜1920年10月）
第三巻（368頁）『協会月報』2巻2号〜3巻1号（帝国製本技工協会、1926年2月〜27年1月）

別冊（約50頁）ISBN978-4-909680-51-8（別冊のみ分売可2,500円）
＊解題・総目次・製本所名索引、執筆者名索引

【第三回配本】2020年10月　配本揃価　37,000円　ISBN978-4-909680-49-5
第四巻（364頁）『協会月報』3巻2号〜4巻新年号〔1号〕
（帝国製本技工協会、1927年2月〜28年1月）
第五巻（312頁）『東京製本同業組合月報』7号〜15号〔16号欠〕
（東京製本同業組合、1925年7月〜〔26年3月〕）

【第四回配本】2020年4月　配本揃価　18,500円　ISBN978-4-909680-50-1
第六巻（276頁）『東京製本同業組合月報』17号〜27号
（東京製本同業組合、〔1926年5月〜27年3月〕）



関連書のご案内

『近代製本関係人物事典―製本業者・社の歴史』
【全二巻】
監修・解題―小黒浩司
揃　価―40,000円

『「大阪」出版史―図書総目録と出版界』
【全四・別巻】
編　集―金沢文圃閣編集部
揃　価―80,000円

『『出版タイムス』―書物業界メディア紙の黎明』
【全六・別巻】
解　題―戸家 誠
編―金沢文圃閣編集部
揃　価―160,000円

『書物関係リトルマガジン集―京名阪古本屋編』
【全七巻・別冊】
編・解題―小林 昌樹
揃　価―138,000円

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣
〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30
Tel 076-261-8884　Fax 233-3111
□書店様へ…ありがとうございます
直接小閣までお申し込みください

図版はすべて本書より
価格は税別　050／11／4000

＊文圃文献類従 72＊

近代日本 製本関係雑誌集成 1
―大正・昭和初期編

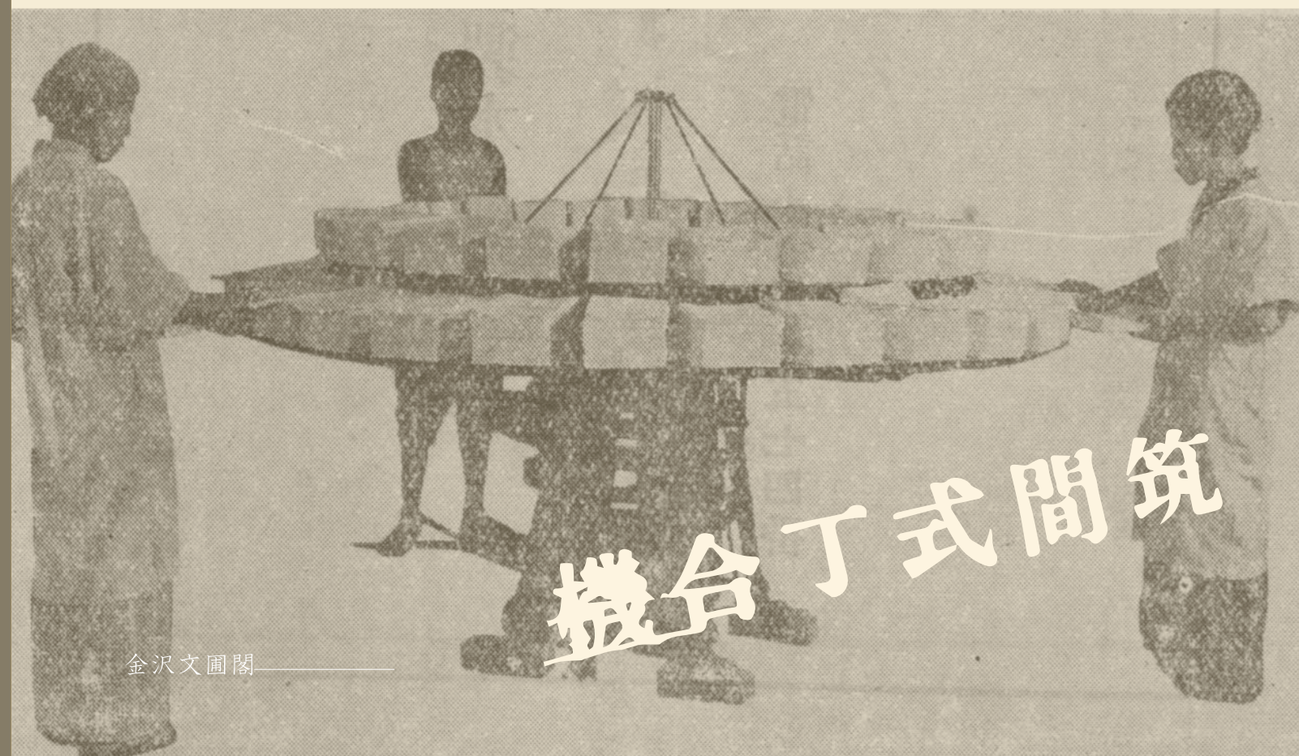
読書の大衆化により1920年代から30年代は、日本の製本界の一大発展期であった。

編・解題―小黒 浩司

全七巻・別冊
【編集復刻版】

早く、安く、多数の本を造ることが求められ、
製本界にも機械化の波が押し寄せ、
製本や印刷などの周辺業界も活況を呈した。

書物とは書かれた内容のみならず、
紙／印刷／装丁／製本などに関する多くの情報を含んでいる。
洋装本＝近代書物の製本術がこの列島に導入されてから150年近く経過した。
近代日本の製本史という面からモノとしての書物にせまる。



金沢文圃閣

【刊行のことば】

製本界の一大発展期を映し出す貴重な情報源

小黒 浩司

このたび、『近代日本製本関係雑誌集成　1—大正・昭和初期編』（以下、本集成）として、1920年代から30年代に創刊された『日本製本時報』（日本製本時報社）、『東京製本同業組合月報』（東京製本同業組合）、『協会月報』（帝国製本技工協会）、『製本業報』（製本業報社）の4誌が復刊されることになった。この国の製本業界の歴史を考究する上で、本集成収録誌の本文あるいは広告が、大いに役立つであろう。

本集成収録4誌には、それぞれ「見どころ」がある。その一端は第二回配本（別冊）に掲載の解題に述べたので、ここでは簡略に本集成刊行の意義をまとめておきたい。

1920年代から30年代は、好不況の波が激しい時期であったが、日本の製本界の一大発展期であった。その基盤となったのが、大正デモクラシーの時代に花ひらいた大衆文化である。出版界の盛況により、製本や印刷などの周辺業界も活況を呈した。

また読書の大衆化により、大量出版の時代が到来した。早く、安く、多数の本を造ることが求められ、製本界にも機械化の波が押し寄せた。

製本界の変化は、当然そこで働く人々にも影響を及ぼす。製本労働の変容は、20世紀初頭の労働運動の高揚とも関連し、時に深刻な対立を生み出した。本集成収録の4誌は、当時の生々しい様を伝えている。

こうした製本業界の状況は、戦前期日本の産業界、労働界全体に多く共通することでもある。つまり本集成は、往時のこの国の製本界の諸相を映し出す貴重な情報源であるとともに、近代日本のあゆみを解き明かすことができる一級の資料でもある。

本集成の幅広い活用を期待したい。

〈近代日本製本史略年表〉

1873年　京橋地区に初めて民間の製本所が開設。官公庁、出版社、印刷業者の集中していた京橋地区を中心に、製本業者が増加

1892年　断截機の輸入

1896年　針金綴じ機の輸入。これにより近代化が加速、洋式製本の量が増加、製本業者から機械国産化を望む声が高くなる

1900年　東京製本同業組合創立

1902年　出版界不況のため製本も急減する

1905年　このころ手引き断截機輸入開始。さらに機械化進む

1910年　東京印刷同業組合創立

1914年　海外よりの輸入杜絶し国産の製本材料への要望が高まる
東京雑誌組合、設立

1924年　震災後の復興期に入る。布地類が装幀に使用され始める

1925年　糸かがり機が普及し、大量の製本がここで可能となる

1927年　全集廉価本＝円本時代が現出し、製本料金が低下。箔押業の分業化

1938年　製本印刷機械の製造禁止

1940年　人手不足のため折綴工賃が高騰。日本出版文化協会、創立

7巻

製本業界の状況は、戦前期日本の産業界、労働界全体に多く共通

製本労働の変容は、20世紀初頭の労働運動の高揚とも関連し、
時に深刻な対立を生み出した。

本集成は、当時の生々しい様を伝えている。